

令和 6 年 6 月 12 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00811

研究課題名(和文)小学生の英語の文構造に関する知識の発達：模倣発話タスクによる縦断的研究

研究課題名(英文)The development of syntactic knowledge in Japanese EFL elementary school students: A longitudinal study using elicited imitation tasks.

研究代表者

江口 朗子 (Eguchi, Akiko)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：30758602

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：小学校外国語(英語)の教科化に伴い、言語知識や技能の習得も目指されている。本研究では、小学生が持つ英語の文構造の知識を測定する方法として「模倣発話タスク」を提案して妥当性を検証するとともに、小4から小5(A群)、小5から小6(B群)にかけての縦断的な発達を調査した結果、主に次の知見が得られた。小学生は、統語知識ではなく語彙的な知識や語の線形順序の知識を使って模倣発話を行っている。模倣発話タスクはワーキングメモリの影響をコントロールしながら文法知識と語彙知識を統合して測定することが可能である。外国語学習の中で、文法知識・語彙知識・模倣発話のパフォーマンスはゆっくりではあるが着実に伸びている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

2020年度より小学校高学年で教科としての外国語(英語)が新設され、社会的にも英語教育の領域においても関心が高まっているが、言語習得の観点からの実証研究は少なく、とりわけ小学生が持つ文法知識に関する研究は文法性判断課題を用いた限定的なものであった。本研究で提案する模倣発話タスクは、文中における具体的な箇所
の成否が明確になるため詳細な分析が可能であり、教育実践への応用も期待できる。また、本研究で明らかにした、小学生の文構造や語彙に関する知識に関する実証研究の結果は、より円滑で効率の良い小中接続を検討する
うえでの基礎的データとなる。

研究成果の概要(英文)：With the introduction of foreign language (English) as a formal subject for Grades 5 and 6 students in Japan, acquiring language knowledge and skills such as English sentence structure and vocabulary has become one of the goals. This study proposed an Elicited Imitation Task as a method to measure young learners' knowledge of sentence structure. The study also longitudinally investigated the development from Grades 4 to 5 (Group A) and from Grades 5 to 6 (Group B), yielding the following main findings. First, elementary school students perform imitation utterances based on their knowledge of vocabulary and the linear order of words rather than syntactic knowledge. Second, performance on the imitation task can measure the integration of grammatical knowledge and vocabulary knowledge while controlling for the influence of working memory. Third, grammatical knowledge, vocabulary knowledge, and imitation performance slowly but steadily improved in classroom foreign language learning.

研究分野：外国語教育

キーワード：小学校英語 文構造の知識 模倣発話タスク 音韻的作動記憶 定型パターン 語彙サイズ 英語スピーキングタスク パフォーマンス評価

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

2020年度より、小学校高学年において外国語(英語)が正式な教科となる。小中高を通じ一貫した到達目標を設定し、英語コミュニケーション能力を向上させることが急務とされながらも、英語での情報のやり取りに不可欠な文構造や語彙など言語知識に関する小学生の縦断データに基づいた研究は、絶対的に不足している。とりわけ文構造に関する知識については、小学校学習指導要領の目標に掲げられているが、英語の表現に繰り返し触れることによって気付いたり身に付けたりした英語の語順の規則性や語と語の組み合わせに関する知識をどのように測定することができるかという具体的な提案はされていない。明示的な知識や言語産出能力がまだ十分に発達していない子どもが内面に持つ文構造に関する知識を測定する方法を教育実践への応用が可能な方法で確立し、児童の言語知識の実態を明らかにする必要がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、新学習指導要領に基づいた英語授業を受ける小学生の英語の文構造に関する知識を測定するために模倣発話タスク (Elicited Imitation Task) を使って、処理可能性理論 (Processability Theory) の統語発達の枠組みで定型表現の知識との関連性に注目しながら、縦断データに基づいて、その発達過程を明らかにすることである。模倣発話タスクとは英文を聞かせて口頭再生(模倣)させるタスクで、課題文を調整することにより、学習者が内面に持つ文法知識を測定することが可能であるとされている。本研究では、模倣発話タスクのパフォーマンスに影響を与える可能性のある語彙サイズと音韻的短期記憶も並行して測定することにより、模倣発話タスクにおける模倣発話が学習者の言語知識を反映しているかどうかの検証も行う。

3. 研究の方法

(1) 研究 [雑誌論文: 江口(2022, JES)]

本科研プロジェクトの予備調査として、公立小学校5年生67名を対象に、小学生の文構造や文(以下、「文構造」という)に関する知識を測定する方法として提案する「模倣発話タスク」と、従来の研究で使用されてきた「リスニングによる文法性判断課題」を実施し、それぞれの成否に影響を与える要因を調査した。模倣発話タスクでは、課題文20題の文構造の再生の成否を従属変数、課題文における処理可能性理論に基づいた統語ステージと音節数、学習者の語彙サイズテストの正答数を固定効果とし、リスニングによる文法性判断課題では、課題文24題の文法性判断の成否を従属変数、課題文における統語ステージ、音節数、学習者の語彙サイズテストの正答数、課題文の文法性/非文法性を固定効果とした。両タスクともに、参加者と項目を変量効果として投入して、一般化線形混合モデルにより最適モデルを検討した。

(2) 研究 [雑誌論文: 江口・犬塚(2021, CELES), 江口(2022, CELES)]

公立小学校4年生87名と5年生73名に、聞き慣れた英文における語順の規則性や語と語の組み合わせをどの程度意識したり理解したりしているかを調査するために、「誤り修正タスク」を筆記式で実施した。SVOの語順(*I soccer play.), 否定文の語順(*We eat don't sushi.), be動詞の一致や欠落などの誤りのある課題文8題を「間違いさがしクイズ」と称して英語の文字と日本語の意味を提示し、各課題文の英語をゆっくりと2回読み上げ、誤りの修正(ひらがな・カタカナも可)、または理由の説明が解答できた場合には1点(正答)、誤りの箇所の特定期限の場合には0.5点として採点し、課題文別に正答率を学年間で比較して横断的に観察した。さらに、文構造に関する知識の発達を縦断的に観察するために、次年度の5・6年生に同じタスクの問題順を入れ替えて実施し、2回のタスク実施に参加した82名と70名を縦断分析の対象とした。

(3) 研究 [雑誌論文: 江口(2021, JES)]

公立小学校5年生67名を対象に、英語の文構造に関する知識を測定する方法としての模倣発話タスクの妥当性を検証し、文構造の発達過程を観察するために、「模倣発話タスク」「語彙サイズテスト」「ディジットスパンタスク」を実施した。模倣発話タスクは、理解と産出の両側面が反映されるという利点があるが、一方で、ワーキングメモリとの関連性に注意が必要である。児童の言語知識が模倣発話に反映されるように調整して作成した課題文24題(音節数: $M = 9.4$, e.g., *Are you usually at home on Sunday?*)をPCで取り組める実験プログラムで実施した。「語彙サイズテスト」は、音声提示の英単語に対応する日本語4択の小学生用に開発されたテストであり(佐藤, 2019)、「ディジットスパンタスク」は、模倣発話とワーキングメモリとの関連性を確認するために実施した。研究での採点は、文構造が再生できるか否かの二項値であったが、研究では、文構造の知識の発達をより詳細に観察するために6点法で採点した。語彙サイズと模倣発話スコアの相関が高ければ、文構造に関する知識の測定法としての妥当性が実証できる。ディジットスパンは言語に拠らないタスクであるが音韻的作動記憶を必要とするという共通点があるため、一定の相関があるという仮説が立てられる。

(4) 研究 [雑誌論文: 江口(2022, LET)]

公立小学校5年生83名と6年72名を対象に、音声と文字の英単語認知について、学年間の

差と文字による英単語認知の成否を予測する要因を調査した。まず、研究 1 で使用した音声提示の語彙サイズテストのターゲット語と日本語の選択肢の両方を英語の文字で提示して実施し、1 か月後に音声提示のテストを実施して、それぞれの正答率について学年間の差の検定を行った。また、文字提示と音声提示の場合の学年別の正答率の散布図と相関分析の結果から、両者の関連性を観察した。文字による英単語認知の要因に関する調査は、5・6 年生のデータを一つの集団としてまとめたうえで、正答率の上位群と下位群の 2 つのグループに分けて、各群において、文字による英単語認知の成否を従属変数とし、音声による英単語認知の成否、語の頻度、初頭音のローマ字との類似性の 3 変数を独立変数として、重回帰分析を行った。語の頻度は、小学校外国語の検定教科書 7 社における頻度 (Average Reduced Frequency) (佐藤, 2021) に基づいた。

(5) 研究 5 [雑誌論文: 江口(2022, JES)]

公立小学校の 5 年生 80 名と 6 年生 61 名の学年末に、同一の「英語スピーキングタスク」を実施し、そのパフォーマンスを学年間比較することにより、児童が外国語科で学習した語彙・表現・文構造など言語に関する知識や技能の保持の実態を調査した。国際交流をしている台湾の小学校から来た転校生と英語で話す(やり取りする)というバーチャル体験ができるプログラムを作成し、5 年生の各単元のパフォーマンステストの評価対象の疑問文の産出を促す限定産出型と発話の内容を限定しない自由産出型タスクを実施した。学年間のパフォーマンスの違いや児童の誤りの傾向を明らかにするため、項目独立型の判定基準で、タスク達成度を評価の中心に据え、情報の項目数、意味が伝わるか、文構造や語彙の使用の観点を含めたルーブリックに基づいて 6 段階で評価した。評価者は、小学校外国語科に携わる日本人教師 2 名で、小泉他 (2017) を参考にして評価訓練を行った後、別々に評価を行った。2 名の評価者の評価値が一致しない場合は、研究者が発話を聞いて最終的な評定値を決定した。

(6) 研究 6 [学会発表: Eguchi & Murao (2023, EuroSLA)]

研究 6 では、小学 5 年生を対象に模倣発話タスクが文構造の知識を測定する方法としての妥当性を検証することが目的であったが、模倣発話と文法知識との関連性は調査していなかった。研究 6 では、模倣発話タスクが何を測定しているのかをより明確にするために、小学 4 年生の「模倣発話タスク」データも分析に加え、「誤り修正タスク」を文法知識の指標とするために採点基準を修正して再分析した。小学 4・5 年生計 138 名の模倣発話スコアを従属変数とし、誤り修正タスク、語彙サイズ、ディジットスパンの 3 つの変数を固定効果として、参加者と項目を変量効果として投入して線形混合効果モデルで最適モデルを検討した。

(7) 研究 7 [学会発表: Eguchi & Murao (2023, JSLs)]

研究 7 で、ワーキングメモリの影響を考慮しても、模倣発話タスクが文法知識と語彙知識を同じ対象群(5 年生 78 名、6 年生 60 名)に翌年にも同じ内容の「模倣発話タスク」「誤り修正タスク」「語彙サイズテスト」を実施して 1 年間での伸びを調査するとともに、2 つの異なる年齢群の縦断データにおける模倣発話スコアと文法知識・語彙知識との関連性に違いがあるのかどうかを線形混合効果モデルで分析した。

以上の研究 5 ~ 7 のタスクは小学校の外国語活動・外国語科の授業内に小学校教員による支援の下、研究代表者が実施した。研究 5 ~ 7 は同じ対象群(A 群: 4 年生 5 年生、B 群: 5 年生 6 年生)である。本人・保護者の研究協力への同意と各研究内でのデータに欠損値のないことを条件にした分析対象人数を報告しているため、研究間で対象者数に若干違いが生じている。

4. 研究成果

「3. 研究の方法」の各研究 5 ~ 7 に対応する研究成果の概要を報告する。

(1) 研究 5

模倣発話タスクでは、語彙サイズと課題文の音節数が結果に影響があったが、課題文の統語構造の影響はなかった。同じ構造の文であっても教室内のやり取りの中でチャンクになりやすい表現は再生率が高かった。文法性判断課題では、語彙サイズと課題文の文法性/非文法性が結果に影響があったが、課題文の統語構造も音節数も影響はなかった。以上の結果から、模倣発話や

表 1. 模倣発話タスクと文法性判断課題の成否に関する固定効果のパラメータ

| | 模倣発話タスク | | | 文法性判断課題 | | |
|------------|-----------------|-----------|----------|-----------------|-----------|----------|
| | <i>Estimate</i> | <i>SD</i> | <i>p</i> | <i>Estimate</i> | <i>SD</i> | <i>p</i> |
| 切片 | -1.02 | 1.09 | .35 | 0.64 | .56 | .25 |
| 課題文の統語ステージ | -0.15 | 0.32 | .64 | -0.040 | .15 | .79 |
| 課題文の音節数 | -0.32 | 0.16 | .042 | -0.10 | .13 | .42 |
| 課題文の(非)文法性 | - | - | - | -0.92 | .26 | < .001 |
| 学習者の語彙サイズ | 0.27 | 0.047 | < .001 | .0063 | .026 | .016 |

文法性判断には、母語習得や日常的に第二言語を使用する環境での習得に見られるような統語知識ではなく語の線形順序（語順）や語彙的な知識が反映された可能性が高いと考えられる。

(2)研究

小学4・5年生の横断データと、次年度に調査した小4から小5と、小5から小6への縦断データの分析結果から明らかになったことを簡潔にまとめると次の通りである。学年が上がるにつれて誤りを特定したり修正したりする力は着実に伸びており、特に小4から小5への伸びが著しかった。正答率は文構造や文法項目、誤用の種類や位置によって大きく異なっていたが、課題文別の難易度は学年間で類似した傾向にあった。語彙的な意味のある語には意識が向きやすいが、*be*動詞など語彙的な意味を持たない語には意識が向きにくい。表2は、分析結果の例として、小4から小5への縦断データをまとめたものである。

表2. 誤り修正タスクの結果：4年生から5年生への縦断データ

| 誤用の内訳 | 課題文 | 4年生9月 (n = 82) | | | 5年生終了時 (n = 82) | | |
|-------------------|-------------------------------|----------------|--------|---------|-----------------|--------|---------|
| | | 正答者数 | 誤り箇所のみ | 正答率 (%) | 正答者数 | 誤り箇所のみ | 正答率 (%) |
| 肯定文の語順 | * <i>I soccer play.</i> | 18 | 0 | 22.0 | 71 | 3 | 88.4 |
| 否定文の語順 | * <i>We eat don't sushi.</i> | 10 | 6 | 15.9 | 24 | 17 | 39.6 |
| <i>be</i> 動詞の一致 | * <i>I are Ken.</i> | 11 | 24 | 28.0 | 34 | 36 | 63.4 |
| 助動詞 <i>do</i> 置換 | * <i>Are you have a PC?</i> | 2 | 0 | 2.4 | 10 | 29 | 30.5 |
| <i>can</i> + 動詞欠落 | * <i>I can piano.</i> | 7 | 0 | 8.5 | 48 | 9 | 64.0 |
| <i>be</i> 動詞欠落 | * <i>You hungry?</i> | 10 | 5 | 15.2 | 26 | 33 | 51.8 |
| | * <i>Where my bag?</i> | 5 | 0 | 6.1 | 28 | 4 | 36.6 |
| 助動詞 <i>do</i> 欠落 | * <i>What color you like?</i> | 20 | 1 | 25.0 | 66 | 3 | 82.3 |

(3)研究

5年生の参加者全体の模倣発話スコアは、平均42.8 ($SD = 43.0$, $Range = 7 - 110$)、語彙サイズの平均は529.0 ($SD = 121.6$, $Range = 300 - 780$)、ディジットスパンスコアは、平均3.5 ($SD = 0.8$, $Range = 1.5 - 5.0$)であった。模倣発話スコアと語彙サイズとの間にはやや高い相関があったが ($rs = .67$)、模倣発話スコアとディジットスパンスコアとの相関は中程度であった ($rs = .47$) ことから、模倣発話には学習者の言語知識が反映されており、模倣発話タスクとスコア基準の妥当性は確認できたといえる。

文構造の知識がまだ獲得できていないと判断された児童に焦点をあてて、模倣発話に現れる「語」「句・連語」「文」の頻度を分析した結果、次の知見が得られた。「語」は名詞が大半であるのに対し、「句・連語」は動詞句、名詞句、副詞句など多様であることから、名詞は単体でも記憶に残りやすいが、動詞はチャンクで記憶されやすい。また、単語とわずかな句・連語のみが模倣発話できる段階であっても、*What do you want ~?* や *Do you have a pencil ~?* など、授業で繰り返し聞いたり話したりした定型文は再生しやすい傾向にある。以上の知見から、今後、インプット量が増えて文字にも親しむことにより、定型文の語や句を入れ替えて使用する定型パターンの段階へと進むことが期待できる。

(4)研究

音声による英単語課題の正答率は、5年生 ($M = 67.3$, $SD = 15.1$) よりも6年生 ($M = 74.3$, $SD = 15.8$) の方が有意に高く ($p < .01$)、文字による英単語課題の正答率も、5年生 ($M = 55.1$, $SD = 19.7$) よりも6年生 ($M = 67.1$, $SD = 20.2$) の方が有意に高かった。各学年の音声と文字による英単語課題の正答率の相関分析の結果は、5年生はやや高い相関 ($rs = .69$)、6年生は高い相関 ($rs = .92$) があり、学年間の相関係数に現れる分布状況の違いは、散布図からも観察できた。両学年に共通していることは、音声提示の方が文字提示よりも正答率が高いことと、文字提示の方が音声提示よりも正答率のばらつきが大きいことであった。

表3. 文字による英単語認知を従属変数とする重回帰分析の結果

| | 下位群 | | | | | 上位群 | | | | |
|---------|----------|------|------|-------|---------|----------|-------|------|--------|---------|
| | Estimate | SD | t | p | β | Estimate | SD | t | p | β |
| 切片 | 3.85 | 5.39 | 0.72 | .48 | | 21.78 | 5.72 | 3.81 | < .001 | |
| 頻度 | 0.01 | 0.01 | 1.71 | .095 | .17 | 0.002 | 0.004 | 0.62 | .54 | .05 |
| ローマ字類似性 | 15.44 | 4.12 | 3.75 | <.001 | .37 | 5.80 | 2.71 | 2.14 | .04 | .16 |
| 音声英単語認知 | 0.56 | 0.08 | 6.59 | <.001 | .66 | 0.66 | 0.07 | 9.26 | < .001 | .80 |

表 3 は、文字による英単語認知の成否を従属変数とした重回帰分析の結果を示している (β = 標準偏回帰係数)。文字による英単語認知の下位群・上位群ともに、成否を最もよく予測していたのは音声による英単語認知で、次にローマ字による類似性であった (下位群: $R^2 = .65$ 、上位群: $R^2 = .75$)。つまり、英語を読むという活動を取り入れる前の学習段階での音声で語句や表現に十分に慣れ親しむという経験の重要性が再認識されたといえる。また、上位群の標準偏回帰係数は、音声英単語認知が .80 であるのに対し、ローマ字読みとの類似性は .16 であったことから、いずれの段階の児童もローマ字読みの知識を利用して英単語を読もうとする傾向はあるが、ある程度読めるようになってきた児童は、それ以外のストラテジーも使って読んで意味に繋げているということが推測できる。

(5)研究

小学 5・6 年生の「英語スピーキングタスク」の限定産出型タスクにおいて、7 項目のうち 3 項目 (e.g., *What Japanese food do you like?*) のパフォーマンス評価が 5 年生の方が 6 年生より有意に高く ($p < .001$)、残りの 4 項目と自由産出型タスクの 3 項目すべてにおいて学年間での差がなかった。6 年生の方が認知的にも発達し累計学習時間も多いにも関わらず予想に反した結果になった理由として、各単元で行うパフォーマンステストが 5 年生は即興性が求められる「やり取り」が中心であったのに対し、6 年生はすべて事前準備をする「発表」であったことが考えられる。やり取りと発表という 2 つの領域のバランスに配慮したタスク活動や評価、各単元で学習した表現を異なる場面でも使用できるようなスモールトークの活用などが望まれる。

疑問文産出における誤用は、例えば、主語や動詞の欠落 (**What Japanese food? *What food eat Japan?*)、*Wh* 疑問文での助動詞 *do* の位置 (**What do you like Japanese food?*)、語彙的な誤り (**What is your birthday?*) などがあり、評価値レベルにある程度対応した疑問文の発達過程が観察された。

(6)研究

模倣発話タスクにおける模倣発話が何を測定しているのかを明確にするために、4・5 年生の模倣発話スコアを従属変数、誤り修正タスク (文法知識)、語彙サイズ (語彙知識)、ディジットスパン (音韻的作動記憶) を固定効果、参加者と項目を変量効果として線形混合効果モデルで検討した。その結果、最適モデルは、ディジットスパンが主効果 ($Estimate = 1.71, t = 2.93, p < .01$)、文法知識と語彙知識の間には交互作用があった ($Estimate = 7.21, t = 4.12, p < .001$)。この結果は、模倣発話タスクにおいて、課題文を丸暗記して模倣するという問題の可能性をコントロールしながら小学生が持つ文法知識を語彙知識と統合して測定できることを示している。

(7)研究

小学 4 年生から 5 年生 (A 群) と 5 年生から 6 年生 (B 群) の縦断データにおいて、模倣発話スコア (A 群: $p = .011$, B 群: $p < .001$)、文法知識としての誤り修正 (A・B 群: $p < .001$)、語彙サイズ (A・B 群: $p < .001$) はいずれも有意に伸びた。小学生が 1 年間の外国語としての英語学習を通して、ゆっくりではあるが着実に言語知識を身に付けていることが確認できた。

A 群と B 群という学年が異なる 2 つのグループの縦断データにおける模倣発話と言語知識 (文法知識・語彙知識) の関連性については、線形混合効果モデルにより模倣発話スコアを予測する最適モデルを検討した。表 4 は、A 群・B 群それぞれの参加者と項目の変量効果も含めた最適モデルにおける固定効果の結果を示す。タイミングは、縦断データにおける 1 年目か 2 年目かのタイミングを指す。A 群では、文法知識と語彙知識がそれぞれ発達することにより模倣発話スコアに影響したといえる。一方、B 群では、文法知識と語彙知識の発達の模倣発話スコアへの影響に加えて、語彙知識とタイミングに交互作用があった。6 年生よりも 5 年生の方が語彙知識の影響が大きいという結果であったが、これは、6 年生では語彙知識以外の他の知識や能力も発達して模倣発話に寄与するようになってきたためであると推測できる。

表 4. 模倣発話スコアを予測する固定効果のパラメータ

| | A 群 (4 年生 5 年生) | | | | B 群 (5 年生 6 年生) | | | |
|------------|-----------------|-----------|----------|----------|-----------------|-----------|----------|----------|
| | <i>Estimate</i> | <i>SE</i> | <i>t</i> | <i>p</i> | <i>Estimate</i> | <i>SE</i> | <i>t</i> | <i>p</i> |
| 切片 | 1.64 | 1.29 | 12.7 | .000 | 1.94 | 1.49 | 13.0 | .000 |
| 文法知識 | 4.57 | 2.22 | 2.06 | .042 | 1.23 | 2.71 | 4.54 | .000 |
| 語彙知識 | 6.36 | 2.83 | 2.25 | .025 | 2.18 | 5.41 | 4.03 | .000 |
| タイミング | - | - | - | - | -5.81 | 7.54 | -0.82 | .414 |
| 語彙 × タイミング | - | - | - | - | -8.25 | 3.56 | -2.32 | .021 |

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 7件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 7件）

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 江口朗子 | 4. 巻 59 |
| 2. 論文標題 小学生の音声と文字による英単語認知の発達 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 Language Education & Technology | 6. 最初と最後の頁 51-76 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24539/let.59.0_51 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|--|-------------------|
| 1. 著者名 江口朗子 | 4. 巻 51 |
| 2. 論文標題 小学生の英語文構造への気付きとメタ言語知識の発達 縦断的調査から見えること | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 中部地区英語教育学会紀要 | 6. 最初と最後の頁 1-8 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20713/celes.51.0_1 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 江口朗子 | 4. 巻 22 |
| 2. 論文標題 小学校外国語科における「話すこと」のパフォーマンス ルーブリック評価による学年間比較 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 JES Journal (小学校英語教育学会学会誌) | 6. 最初と最後の頁 118-133 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20597/jesjournal.22.01_118 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---|--------------------|
| 1. 著者名 江口朗子, 犬塚章夫 | 4. 巻 50 |
| 2. 論文標題 小学生の英語文構造に関するメタ言語知識の発達 「間違いさがしクイズ」による探索的研究 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 中部地区英語教育学会紀要 | 6. 最初と最後の頁 9-16 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20713/celes.50.0_9 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 江口朗子 | 4. 巻 67 |
| 2. 論文標題 小学生の英語受容語彙サイズ 外国語活動・外国語科における意図的学習の有用性 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 名古屋女子大学紀要, 人文・社会編 | 6. 最初と最後の頁 205-216 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 江口朗子 | 4. 巻 21 |
| 2. 論文標題 小学生の英語の文に関する知識の測定法としての模倣発話タスク 妥当性の検証と模倣発話の質的分析 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 JES Journal (小学校英語教育学会学会誌) | 6. 最初と最後の頁 111-126 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20597/jesjournal.21.01_111 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 江口朗子 | 4. 巻 20 |
| 2. 論文標題 模倣発話課題と文法性判断課題による小学5年生の英語の統語構造に関する知識の測定—結果に影響を与える要因分析— | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 JES Journal (小学校英語教育学会学会誌) | 6. 最初と最後の頁 304-319 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20597/jesjournal.21.01_111 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計9件(うち招待講演 1件/うち国際学会 2件)

| |
|---|
| 1. 発表者名 江口朗子 |
| 2. 発表標題 小学生の英語文構造に関する知識の発達 文法性判断課題と誤り修正タスクによる縦断的研究 |
| 3. 学会等名 第22回小学校英語教育学会 (JES) 四国・徳島大会 |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 江口朗子 |
| 2. 発表標題 即興的なやり取りのパフォーマンス評価結果を話すことの指導に生かす |
| 3. 学会等名 小学校英語シンポジウム@名女大2022 |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 江口朗子 |
| 2. 発表標題 小学生の英語文構造に関するメタ言語知識の発達 - 縦断的調査から見えること - |
| 3. 学会等名 中部地区英語教育学会 第50回記念愛知大会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 江口朗子 |
| 2. 発表標題 英語で「話すこと」における「知識・技能」のパフォーマンス評価 小学5・6年生の学年間比較 |
| 3. 学会等名 第21回 小学校英語教育学会 関東・埼玉大会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|------------------------------------|
| 1. 発表者名 江口朗子 |
| 2. 発表標題 英語模倣発話に観察される 小学5年生の統語発達 |
| 3. 学会等名 第20回 小学校英語教育学会 中部・岐阜大会 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 江口朗子 |
| 2. 発表標題 小学生の英語の文構造に関する知識 -模倣発話タスクと文法性判断課題の結果に基づく予備的検討- |
| 3. 学会等名 小学校英語教育学会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Akiko Eguchi, Remi Murao |
| 2. 発表標題 A longitudinal study of the relationship between elicited imitation performance and linguistic knowledge in young EFL learners |
| 3. 学会等名 The 24th Annual International Conference of the Japanese Society for Language Sciences (JSLS2023) (国際学会) |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Akiko Eguchi, Remi Murao |
| 2. 発表標題 What do elicited imitation tasks for young EFL learners measure? |
| 3. 学会等名 European Second Language Association (EuroSLA) 32 (国際学会) |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 江口朗子 |
| 2. 発表標題 実証データに見る「外国語」の小中接続 |
| 3. 学会等名 令和5年度 中部地区英語教育学会愛知地区大会 (招待講演) |
| 4. 発表年 2024年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------|---|-------------------------------------|----|
| 研究 分担 者 | 村尾 玲美 (Murao Remi) (80454122) | 名古屋大学・人文学研究科・准教授 (13901) | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|